ARUPHO VARIANT 2.]

, clop, cloch, cloffoto, cloppoto, clocchoto

びっくりしたお父さん

稲垣足穂

私自身はダダオタリ論であるか、君子ヤ人ベでならば何者であろか、何ものかとつきとめることは怪しそ何事ヲ言葉ヲ言葉ヲ言葉であるか、ぞれはいせんとまたれていてはいけない若きへは箱のそ[illegible]は進む

真ん中空を横切って行く銀色の飛行船もいい、水も空もけーめのつかの浸蝕の明方に二重線がんでいる白色の電柱もいい

人間と歴史社

【TARUPHO VARIANT 2】
鑑定結果
clot, clop, cloch, clotfoto, cloppoto, clocchoto
"たしかめよう"

【Tarupho Variant 2.】びっくりしたお父さん

初版発行……一九九一年五月一日
著者……稲垣足穂
発行者……佐々木久夫
造本・装幀……戸田ツトム＋岡孝治
装画……まりの・るうにい
制作……株式会社論風社
印刷……中央精版印刷
発行所……株式会社人間と歴史社
〒一〇一 東京都千代田区神田駿河台三－二
電話■〇三－三二五一－四〇一五(代)
振替■東京五－五七三九七

◉……落丁、乱丁本はお取替えします
◉……定価はカバーに表示してあります
◉……© 1991 Miyako Inagaki ISBN4-89007-067-2 Printed in Japan

[Tarupho Variant]

2.

びっくりしたお父さん

びっくりしたお父さん

目次

[Taruphio Variant 2.]

童話の天文学者……○○六
童話の天文学者……○一六
壜詰奇談……○一二
チンハット氏とデドメン君の銷夏法……○三二
円錐帽氏と空罎君の銷夏法……○三八
我が棲いはヘリュージョンの野の片ほとり厭わしきカルニアの運河に沿うた地下墓地だ……○四四
父の不思議……○五四
蘇迷盧……○五九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

出発……○六二
出発……○六九
びっくりしたお父さん――或いは「僕もそう思います」……○七五
青い箱と紅い骸骨――A study in Gray……○八五
リビアの月夜……一〇〇
サハラの月……一〇九
リビアの月――クリスマス用シガー及びシガレット……一一六
リビアの月夜……一三五
電気の敵……一四七
電気の敵……一五五
ココァ山奇談……一六四
ココァ山の話……一七四

真面目な相談……一八五
打てば響く――一九三二年問答録……一八八
奇妙なフィルムの話……一九一
よりどり前菜（オードブル）……一九四
付・「新青年」発表作品への回顧……二〇〇
白いニグロからの手紙……二〇三
白いニグロからの手紙……二〇六
机上同盟成立奇談……二一一
ジェキル博士とハイド氏――或いは――二人の彼……二一七

うすい街……二三九
薄い街……二五一
お化に近付く人……二五七
お化に近付く人……二六三
お化けに近づく人……二六九
非情物語（上）……二七六
非情物語（下）……二八四
水晶物語……二九九
WC……三二〇
WC……三三九
よりどり前菜（オードブル）……三五〇
解説　足穂と未来派の舞台としての『新青年』――高橋康雄……三五二

童話の天文学者

科学風な幻想をものする作者としての私に手紙をくれた最初のひとりがミチタルナガエであった。私の出たらめから生れた海外著述についての問合せであったがこの読者の手になったという小説も間もなく私の元へ送られてきた。神戸の山手のたそがれ時に現出するメーズの奥から、セザレに似た黒ずくめの扮装をした『黒猫』他はシルクハットをかむった燕尾服の襟に三日月のメダルをつけたやはり仮面の『三日月』不可解なこんな二人物が街頭やホテルに出てきて変幻きわまりないいたずらをする、しかも喧伝された風説は新聞にも出たが、結局、人も自動車もプラタナスも見えぬ魔法の糸につなぎとおし、自身は山のかなたに逃げてしまうツァイライトの神秘とするほかはなかった。そんなすじのものがあったが、完備したとは云えぬにしろ、ドイッチェロマンチケルをアップツーデートに遊離させたミチタルナガエの気稟に、作者が理科志望であるときいたことと合わして、私は親しき同族をかんじたものである。が、ここでそれら吾党の芸術について述べようとするのでない。私は、神戸市において近事注目すべき現象としてつたえられている広島高等学校理科一年生長江道太郎君――即ち、はからずもかつての幻想の語り主なるナガエミチタルなる人によって経験された幻覚事件のあらましを告げれば足りる。かの癲狂院長の傀儡事件を夢想しがちな青年が、神戸の山手において一夜、現実と夢幻との間に介在するという形而上学的都市にまぎれこみ、白髪緑衣の天文学者と対面したと云ったら諸君は冗談もいいかげんにせよと云うかもしれぬ。現に、始終

をもって学業に身を入れぬ学生の酔狂と決定したのに、当事者の伯父にあたる岡島吉蔵氏があるし、前夜のナガエミチタルが卓上にあったビール瓶を茶猫と間ちがえたことから、それもあまり壮健ならぬ弟の気のまよいと解釈したのに、同市葺合に住むナガエ君の義兄がある。これらを顧るとき吾々も結局、当夜はじめて神戸の夜を空想家が、ガス燈の光に魅入られて引き起したまぼろしにすぎなかったとしていいところへくるかも知れないが、そんな、見解に反して、事件に或る意味の客観性を承認している者に大阪朝日新聞神戸支社の竹久君がある。——妖怪館の真疑をたしかめに行った豪傑に何の変異も起らなかったからとて霊怪現象の否定されるはずはない、外面的な豪傑には受信機などいう装置が期待されなかったのでないか、豪傑の有せざる機能をもつが故により強くそれをかんずる者の瞬間において、ビール瓶と茶猫とカリズムを同じくすることは察するに難くはない。——かつて同市北野町の異人館の怪について提出した汎神論をあらたにしたこの私の友人は、そのためまた一ページを費したことによって編集長の不興を買ったのであった。その議論が正鵠を得たものであるかどうかは私は知らない、が、そのほかに、事件の真疑如何については明言しないが、目下当事者同伴東京帝国大学心理学教室におもむき、事実とすればこの方面より解明さるべき該幻覚の鍵、即ち、ナガエミチタルに長時間にわたってその形而上学的市街存在の可能をといた人物の現実における住いというドイツゲッチンゲン大学にまで紹介の手を延ばそうとしている他のひとりがあげられる。ナガエミチタルの学校で自然科学概論の教鞭をとっていた名和教授である。なお武久君によると、同校化学教授の池田氏、ならびにこの二教授の先輩にあたる東大の三宅田丸両博士も相当の注目を払っている様子と云うから、吾々は近く具体的な解説をきけるかもしれない。それはそうとして記述の本すじにかえらねばならぬ私は、じつは当時在京中のため行きちがいになり、そののちまた名和教授の下にあって一般の面会音信をとめられた人からは何のきくところなか

ったことを断わらねばならぬ。そうは云いながらも、義兄がそこへ転任したことによりはじめてあこがれの市街をあるいていたナガエミチタルが、坂の一角から目にうつった花火に近よろうとしてまぎれこんだ不思議な露地から、整然とガス燈がともったおぼえもつかぬ清澄な外国風の路上につき出され、行ってもきても走馬燈のように同じところをくり出してくる猫の子一匹いないところのむこうの丘に緑いろの灯をみとめ、ついにその上の薔薇畑に包まれて立つ魔法のような機械にみちた円屋根のなかに白髯の天文学者と対座するに至った径路は、諸新聞に最も好奇的につたえられたことであり、そんな一般の要点であってみれば、今さら如何ようにくわしく順序を追うとも、結局ここに風変った活動写真のセットの説明以上のものをあたえられるとも思われぬから、私はここには、いずれの報道にもきわめて胡散なものであったナガエミチタルのまえにおける天文学者の口説というのを、一夕池田教授の親戚にあたる武久君の語ったまま比較的詳細にかきとめるだけにしたいと思う。

ここは地球上のいずこでもないが、いずれにでもあって行こうと思えば誰でも行くことができるところ、私は吾々が生活をしている現実の世界にある奇妙な磁味『夢の結晶』とでも云うべきもの、可能は阿片というものに暗示されていたが、それよりもっと朗らかなクスリを提供しようとしている物好きである。こんなところから天文学者は薄板説というのを説明しはじめたのである。――現実の世界の時計の針がきざむ秒と秒との間にはある不思議な黒い板がはさまっている。それは大へんにうすく肉眼では見えぬが、ひろがりは宏大無辺である、かりに『夢の板』と名ずけるのは、この形而上的な存在をもって、古い書物に示されているように現実界にもまださまざまな不思議が起っていた頃、空気にまじってひろがっていた夢の結晶したものだと解釈されるからである。故にその昔、電気のようにあたりにみちみち、木や人や水に作用していた夢が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かたまったものであるそれらの黒板のなかには、今もって吾々にはうかがい知るを許されぬ驚異が起るはずである。肉眼で見えないものを何によって見るか？　それは一口に云うなら、まっすぐに行く者には見えぬが横を向いた者には見えるというような条件に支配されている。しかし目にとまる角度は非常に微妙な一点にかかっているから、普通に横を向いただけではみとめられぬ。昔からうかがうを得たのが何千万人中のひとりと云えると共に、何人も毎日何百回となく目にとめているのだとされる所以である。吾々があるいているとき、ショーウインドーや音楽や人や自然物などに気をひかれてふいと首をまげさせられるのも、かく説く人の意見をもってすると、春の野べに立つ糸遊のごとくにデリケートな薄板がそれら物象をかりての誘惑ときめられる。そんなとき吾々の目が適当な角度に止ったなら、吾々はその音楽なりうつくしい顔なり花なりを中つぎとしてはてもしられぬ美の領域にはいるを許されるはずだが、大ていの場合は顔をまげる運動にかすめる切線においてのみ黒板をみとめるだけであるから、その奥にそんなものが存在しようなどとは気ずかないですぎてしまう。そうかと云って全く知らないのでもない。よくわき見をしたがる人は、黒板がチラッと網膜をかすめる瞬間だけにおいてもすでにある種の気持があたえられるので、何云うともないその夢心地を求める素質をもっていると説明される。それと云うのも、吾々がそのために本然の意義をくらまされているかの実用的に逆行する注意があたえられるということに他ならぬが、一つに黒板はそれほどの魔力をそなえたもので、かかる作用はまた近来霊怪現象研究家の説くところと一致して白昼より夜間により強く行われる。この遊離物も太陽の光波にはいちじるしく活力をさえぎられ、それがにぶってくるツァイライトや、月や星の光に地上がてらされるときに最もよく本領を発揮するようである。ましてかの一夜の月光が蟹や貝類にあたえる化学作用、夜を好む野性動物にそなわる電気性、それを伝説化したいわゆるフェアリー族、その他、昔から何人にも知られてき

た夜の不可思議性のさまざまも、結局そんなところから解明されて行く素材ではなかろうかと考えられる。全くかかる場合『月光のなかにはいぶかしきものあり』との詩句も単なる気まぐれとは云えない。アラビヤンナイトやグリムやアンデルセンなどという荒唐にして優婉な物語の作者たちは、あるいはその秘密は薄板状の世界を見得たのみか、みずからある程度まで侵入し得る能力をもっていたのではないかとさえ考えられる。それが事実とすれば、そんな物語が作者の空想に生れたということは訂正しなければならぬ。いやすでに空想と云えるかぎりは吾々はその出所を追及しなければならぬ。かく説く人の信ずるところを云えば、それら夢のふる里は厳として存在する。セカンドの刻む音と共に、『あらゆる美と不思議が目ざましかった神仙時代』この方何千万枚ともはかりしれず重ねられてきた魔法のワクのなかには、今もって少数の人がくみ出したお伽噺に代表されるくらいでは及びもつかぬ神秘が千万無量に蔵されている、――ここまでくればすでにそのまえにあった人のように、吾々はナガエミチタルが神戸の街からガス燈青い幾何模様めいた都会にまぎれこんだのも、じつは黒い板のなかにはいりこんだのであるということがわかってきたはずである。坂路で花火の方をふり向いたはずみにそれが目にとまり、坂の傾斜がまたミチタルナガエをすべりこませるのに都合がよかった。今晩その貿易港では碇泊中のイタリー軍艦に舞踏会が催され、そこでは普通の花火しかあがっていないのに、それが今までどこにも見なかった変幻をきわめてきたとは、とりもなおさず、君の目に完全に薄板がみとめられたからでないか。赤い円錐帽のさきをひるがえした天文学者はミチタルナガエの顔をうかがい、それからそういう自分自身のことにうつって行った。

心配無用、私はドイツのハルツ、――と云うと魔女の伝説に名高い山をよび起してくれようが、そのワルプウルギスの夜のお化けでも何でもなく、その山にほどちかいゲッチンゲン大学の天文台にいる理学博士でいずれ現実界でお目にかかられ

ようが、世界にもかなり名を知られた三十を越したばかりの人間だ。ところでこのドイツの天文学者は、かねてから吾々がわき見をした瞬間に起る夢心地と云うものに気をつけていた。私は子供のときからそんなふうな事柄については得心が行くまで研究をしなければすまないたちがあり、専門家としてもいくつかのホーキ星を発見した他二三の新説を裏ずける月光平面板、エーテルスコープなどいうものを発見している。今から二年まえの十一月の夜のこと、私は大学の円屋根――こんなところとは全くちがったその大きな鉄傘の下で、四十インチの反射望遠鏡をとおしてアンドロメダ星雲のなかにある空隙を観測していた。この渦状ガス体のまんなかにのぞく深淵が、ベーメ教授の声明以来天体学上の大問題となっている事実は君も知っていよう。まことにこの底しれぬ穴は宇宙から虚無への間道とも云われ、世界のくさび、即ち止めどころであろうとも考えかけられている。この秘密をもつ個所をしらべていたとき、はからずもこれは別方面の研究題目であって、さっきあらましをはなした薄板界の存在という実証をつかむことに至った。――ここで、所謂時空と、世界の軸があるアンドロメダ座の穴と、私のいう薄板界がどんな関係になっているかについて概念だけでもあたえておく必要をみとめるが、それは一口にむずかしいから、そのうちうなずかせることができようということにしてもらい、さてこの事実を見つけた私は、それでも今すこしの確実性をにぎるまではと内密な研究にしたがっていた末、これも思いかけぬ簡単な動機から自分ひとりだけ黒板の一部を、非常に不完全な形式においてながらも応用されるところまで進んだ。自分で黒板界へはいれるようになってから閑があるたびこんな街にきていたが、何人の姿も見かけぬこと六ヶ月に及んだので、この発見も自分の現世（?）におけるうちは顧みられないのでないかと気づかわぬでもなかった――しかし、今夜迎え得た君こそ、何人も条件さえそなわればいつにてもこの領土の住民たることができるという予想を見事に裏書した。花火の仲立する偶然とは云え知己を日出ずる国

の君に得たよろこびを察してもらいたい。かくしてエスキモーの小舎のようなちいさい円屋根のなかに虹のような光を出すランプをうけてかがやく顔の博士は、ミチタルナガエも気がついてといかけようとしたその人の使用するなめらかな日本語のことに及び、現実界の自分はむろん片言もダメなら、神戸という都会についても東洋の貿易港という他は何も知らない。そんな自分は最初にミチタルナガエの姿を見たとき、失望をおぼえたのに、ナガエミチタルが呈した二三言の英語ののち、これは困った、どこの言葉かな、とつぶやいた意味が自国語のように了解され、つづいてここへきた顚末をきくに及んで、いつか自分のなかにその見知らぬ東洋の青年が見たという花火が何物であったかということまで知っている者があるに気付き、同時に青年の使う言葉と同じ言葉で応じている自身にも気付いた。尤もこんな夢の板のなかでは国家や人種の区別はむろん、かかる一切の外形的条件については何の制限もなく、ただある基本的原理以外は、各人の自由にながるる心の色合、趣味性とも云わるべきものによるさまざまな区別が行われるのみであることは以前からもわかっていたが、今さらそのあざやかな証明を知るに及んでおどろかないわけに行かなかった。そう云った天文学者は花火をあげている軍艦がじつに前週の金曜に入港し、艦長のカルデロ少佐なる名前まで云いあてたが、なお、――薄板界というのは一つの物理的存在でもありその方面からも研究を進めることができる、これについてサンシール航空学校のビール教授が発案した気流撮影器（諸君も知るごとくこの方法によると風洞内ではなく戸外においても研究資料の明瞭な映像がえられるとナウエン電通が報じていた）をエーテルスコープに応用した結果、今や薄板そのものをレンズにおさめるところまできて、そんなにして外面からながめた縦の存在は、ちょうど蜜蜂の箱の内部のワクのかさなりのように見える。――それからまた、ナガエミチタルがとおって来ただっぴろい青いガス燈にかざられた幾何学めいた屋敷街というのは、博士自身の趣味でもあればナガエミチタル自身のそれでもある、そのように変幻自在な薄

板界はそれに働きかける個性のそのときの傾向にしたがって千万にかたちをかえるものであり、思うにこの会合も、一つに同じような夢を考えかけた博士とナガエミチタルとが両方から働きかけた結果にあり、この意味でもそれは現実においては、最も純粋な恋愛状態にでもおけるほかは何人にも得られぬ理想的暗合と云っていいであろう、――したがって今日の吾々の思量を絶した第三存在内の消息について今少し知りえたら、この場所をもってただちにかの時空のそとにあった妖術者と云われたハッサンカンの呪文になされるように、月光にてらされたチグリスユウフラテスの流れがはるか下方に見えるバビロンの空中都市にかえることもできれば、色とりどりのヒトデや貝やめずらしい魚類がおよいでいる印度洋の底にも、そのほか吾々の幻想に及ぶどんな種類にでも不可能なことはないであろう、――いやこの研究における自分の理想は、じつにかかって近き将来、世界中のあらゆる人々を夕方の散歩にそんな好き勝手なところにあそばしめるというのにあり、そのとき、この丘の下の青いガスのまばたくさびしい街上も自動車と人波にうずめられるにちがいなく、現にそんな目的の一方法としてゲッチンゲンの研究室で組立中の機械のレンズからのぞくと、青い波の上に人魚にとりかこまれてゆらめいている赤い帆をつけたいつの世に在ったともわからぬ船が見えかけている、……そんなことが話され、その次に立ち上って博士がうしろの三脚架の上にあったこまかな星形の穴を一ぱいにあけた四角い箱の一方を手まえにひらいたのは、もしそんなふうにして吾々が黒板界を征服するに至れば火星旅行もできるだろうかというナガエミチタルの質問に答えるためなのであった。

幻想と錯覚との区別を知らなければならぬ、と博士は云うのである。世間の人はむろん有名な吾々の仲間のピケリングやフラマリオンまで信じているように、君もこの行っても行ってもはてのない空間にかぎりもない星がぶら下っているという迷信にとらわれている。吾々の地球はいかにもまんまるく実在している、が、世界はそれが中心なのだ。あとは火星も月も

太陽も今考えられているようなかたちであるのでない。云いながら箱のうしろへランプをまわすと、まっくらな箱のなかには螢籠のように星がかがやき、そこをななめにつらぬいた軸についた地球儀がやや大きな円い穴からもれる光にうかびあがった半面をクルクルまわらせはじめた。博士の手は箱の上部のハンドルにふれ、奇妙なパノラマをのぞくミチタルナガエに云った。

ちいさい穴が星、まるい穴が太陽、まんなかの地球は一のゼンマイ仕掛にまわっている。数千年来吾々の頭をなやましてきた宇宙の真相とはじつにこんなカラクリ以上の何物でもない。月がみちたりかけたり四季折々の星座の変化が起り、太陽にコロナやプロミネンスや黒点があるということに気づかぬなど君はうっかりしていないだろう。全く、バビロンアッシリヤの昔から世界中のあらゆる先生方をまんまとかけたオモチャが容易なことで見ぬかれるほど手軽にこしらえてあったとは私にも考えられぬ。即ち、実物はこんな模型とはすこしちがっている。それは一口には、月と星に見える穴のあけ工合と、地球の回転軸との関係が複雑の上に複雑をかさねているというようなことだと云ったにしても、なお月や星の光をかくす太陽のまぶしさ、うごきまわるホーキ星、現に目のまえに落ちてくる隕石、穴とだけでは説明できぬ星雰などはどんな関係に生れるのかというたがいが起るはずである。そうなると時間が必要である。今の場合、私は、この箱とてときどきは豆花火やタバコの吸いがらをほうりこまれぬとはかぎらぬものであり、そんなふうないたずらにごまかされているものの、星空の実際はじつにそんな穴のあいた案外に近い距離にある壁にすぎぬとした方が、何十光年のかなたにあるそれ自身光を放つ巨体などとすることより、より吾々に承認されやすい研究が進行しつつあるということだけ申しのべておこう。さきに云ったアンドロメダ座の穴が世界のくさびだというのも、じつはそれがすこしくゆがんだ箱形宇宙のこわれかかった一隅である

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com